

～私のおすすめの本～

校長 内桶二郎

『赤毛のアン : Anne of Green Gables』(新潮文庫) L. M. モンゴメリ (著)、村岡 花子(訳)

児童文学のバイブルともいわれる『赤毛のアン』。「女の子が読む本」という固定観念から、これまで読む機会が無かった男子も多いと思います。

かくいう私も、「少女向け？TV アニメ」のイメージの強さから、小中高時代は特段、興味・関心を持つことは有りませんでした。友人に勧められて村岡花子版の翻訳をきちんと読んだのは、大学時代。「コンプレックスを力に変える」アンの生き様に触れ、小説『赤毛のアン』の奥深さに引き込まれました。「中学・高校時代に読んでいれば！」と悔やまれたものです。

脳科学者の茂木健一郎さんは、小学校5年生の頃から『赤毛のアン』を愛読し、高校1年のときには原書を英語で読むほど、『赤毛のアン』の沼にハマっていたそうです。NHK ETV の番組【100 分 de 名著】『赤毛のアン』編に講師として出演した茂木さんは「少女のための小説にとどまらず、男子も読むべき教養小説：喪失と獲得の物語である」と熱く語っていました。110 年以上前に書かれた『赤毛のアン』は、国境や世代を超えて人々を魅了し、男女を問わず、今日まで読み継がれています。アンと同様に悩み多き青春の日々を生きる日立北高の皆さん(特に男子に)こそ一読をお勧めしたい“名著”です。きっと読み終えた後には、人生観(人生も?)が変わることでしょう。



物語の舞台はカナダ、プリンス・エドワード島。グリーン・ゲイブルズに住む独身の兄妹のマシューとマリラは、農場の働き手となる男子を孤児院から養子に迎えようとしていました。しかし、手違いによってやって来たのは、アン・シャーリーという貧かななりをした赤毛の女の子でした。物語では美しい自然を背景に、アンが様々な事件や試練・葛藤を経ながらも、豊かな想像力＝「想像の翼」を発揮し、ネガティブなことも力に変え、周囲の人々を明るくしながら人間的な成長を遂げていきます。

ところで、もう一人の主人公である頑固で厳格な働き者のマリラ。彼女の「心の変容」に焦点をあてて読んでも見えがります。マリラもアンと同様に、自己に囚われた状態から、人や社会と関わり、様々な試練や葛藤の中で、自身の視野の狭さに気づき、変容しながら成長していたのです。『赤毛のアン』は人間の変化の可能性について、私たちに気づきを促してくれます。

時を経て読み返しても、その度に新たな発見が楽しめる一冊です。新型コロナ禍によって閉塞感のある今の私たちにとっても、学ぶべき知恵がちりばめられていると思われます。

「アンのゆりかご——村岡花子の生涯」(新潮文庫) 村岡 恵理(著)

『赤毛のアン』を日本で初めて翻訳した村岡花子の明治・大正・昭和にわたる波乱の生涯を、孫娘が描いた評伝。吉高由里子主演(花子役)のNHK「連続テレビ小説」『花子とアン』の原案となりました。太平洋戦争のさなか、敵国の小説『赤毛のアン』を翻訳することを、危険を承知の上で決意した村岡花子。空襲で焼夷弾が降り注ぐ中、「赤毛のアン」の原書と翻訳原稿を抱きかかえて逃げ惑う様子は鬼気迫るものがあります。戦後、村岡の『赤毛のアン』翻訳への情熱と強い想いは翻訳本の出版として結実します。村岡が英語を学んだ、東洋女学院の卒業式でのミス・ブラックモア校長の送辞を知るだけでも、読む価値は十分にあると思います。



～図書委員のおすすめの本～

「何者」(新潮文庫) 著者 朝井リョウ

2009年、「桐島、部活やめるってよ」で小説すばる新人賞を受賞し、デビューした朝井リョウさんは、2013年、この「何者」という本で直木賞を受賞するという快挙を成し遂げました。

“就職活動を目前に控えた拓斗は、同居人・光太郎の引退ライブに足を運んだ。光太郎と別れた瑞月も来ると知っていたから。瑞月の留学仲間・理香が拓斗たちとおなじアパートに住んでいるとわかり、理香と同棲中の隆良を交えた5人は就活対策知して集まるようになる。だが、SNS や面接で発する言葉の奥に見え隠れする、本音や自意識が、彼らの関係を次第に変えて．．．。”

これから私たちにも関わってくる就活をテーマとした小説となっているので、ためになる部分もあると思います！ぜひ読んでみてください！

～図書委員からのお知らせ～

こんにちは！図書委員長の小野陽介です。

6月17、18日にはついに皆さんお待ちかねの浪漫祭が開催されます。私もとても楽しみです！そこで、私たち図書委員会にも浪漫祭を盛り上げるために何かできないかと考え、以下の企画を立ち上げました。休憩ついでにふらっと立ち寄っていただければ嬉しいです！

～バックナンバーの掲示～

場所：図書室前廊下

料金：無料

気に入った本は持ち帰っていただいて構いません



担当：3年 小野・高橋